

# 『資本論』における科学と哲学

——梯明秀教授の所説によせて——

清 水 正 徳

『資本論』は、単にいわゆる経験科学ないし実証科学の書でない。だからといって、ある哲学思想から演繹され実証主義と安易に結びついた形而上学的似而非科学でもない。

主観的合理性に依拠する「理念型」の科学論が、『資本論』を自らの方法論によって再構成してみても、また論理実証主義の科学者たちが『資本論』体系を自分たちの気のすむ相対主義科学のうちに鑄こむことに成功したとしても、いずれも『資本論』の科学性を活かしたものとはいえない。

一方、ひとつの無限発展の存在論から、自然的運動をモデルとして歴史的世界の発展を基礎づけ、『資本論』の展開をも客体的物質世界の運動を認識するかのように受容、解釈することがあるとすれば、これは勿論独断的形而上学と実証主義との機械的結合というべきものであって、マルクスの真意を捉えたものとはいえない。

『資本論』の学問性については、われわれが現代に生きながら、この書から何ごとかを学びとろうとする度に、常に反省し、自覚していなければならない。

梯教授の経済哲学的思索は一貫してこの関心を離れず、『資本論』を単なる経験科学とみたり、あるいはこれ

を客体的唯物論に機械的に依存させて理解することを戒めている。わたしは、教授の『資本論』を論理学として読む」という戦前からの主張に心から賛成するものであり、自分なりにその方向で努力しているつもりである。また、この基本態度から直接出てくる問題であるが、従来とかく軽視されがちであった『資本論』の体系的な問題についても教授は執拗な論究を展開してこられたし、当然のことながらこの志向にはわたしも強く共鳴してきた。ただ、この共通の基本線にたつ研究途上にあつて、教授から年来鋭い指針を与えられながら現在のわたしは『資本論』の学的把握を教授の学説とひとしくすることができない。教授が『資本論』を科学であると同時に哲学であるとして、十数年来エネルギーに築いてこられた経済哲学的体系構成に対して、わたくしはあくまで『資本論』を科学として把握しながら（もとよりマルクスの意味における *Wissenschaft* としてではあるが）、この研究と人間主体との構造関連を考究してゆきたいのである。そして、教授のいわれるように『資本論』における科学と哲学とがきびしく区別されるとき、教授の解明される『資本論』の科学としての要素が甚だしくマルクスの真意を逸脱するのではないかという疑問をもたずにはおられない。安易な現象主義や客体主義を厳しく批判する点において教授の徹底した態度にまったく敬服するものであるが、わたしは『資本論』把握の積極面において教授との深刻な距離を自覚せざるをえない。

わたしは、教授の『資本論』における科学と哲学の問題をできるだけ教授の所論につきながら検討して、この問題に関するわたしの見解をも展開してみようと思う。

註 樋教授の著書、論文掲載誌を次の符号で略記する。

A 『経済哲学原理』一九六二、日本評論新社。

B 『ヘーゲル哲学と資本論』一九五九、未來社。

C 『資本論の学問的構造』一九五二、弘文堂。

D 『資本論への私の歩み』一九六〇、現代思潮社。

E 『社会科学における理論と検証』一九六〇、『思想』第四三三号。

## 一 『資本論』の科学性について

マルクスが『経済学批判』や『資本論』で Wissenschaft と云っているものを、梯教授は根本的にはヘーゲルの Wissenschaft der Logik における W と同じ性格のものとしておられるようである。それは科学性（悟性）をその一つの契機としてもつ学の体系、すなわち哲学そのものである。教授は『経済学批判序説』の中のことば wissenschaftlich を河上博士以来「科学的」と訳したことをきびしく批判され「学的」とすべきだと主張（C、六八）されたのをはじめ、総じてマルクスのいう Wissenschaft はあくまで「学」と訳すべきだと主張（C、六八）されている。教授にとっては、その由つて来るところ単なる訳語の問題ではない。そしてヘーゲルの『論理学』についても、たとえば三枝博音氏の「悟性的契機」、「外的反省」の強調を批判し「マルクスにおいても弁証法を成し立てしむるものは主体性であつて、そのかぎりヘーゲルの思弁的契機を……継承するものと、わたしはみる。」（C、一〇三）といわれる。エンゲルスが、ヘーゲルの弁証法は正—反—合の「合」に力点があるのに対して自分たちの弁証法は「反」に力点があるということを云っているが、わが国でも旧唯研以来この「反」の弁証法という性格が端的に強く現われ、これが梯教授のいわれる「外的反省」の強調となつて安直な客体主義科学（？）となつていったことは確かである。いわゆる正統派マルクス主義が人間を全くの物質的必然観の上にて、客体的

にしか実践の基礎原理を与えることができなかったのに対して、教授が『資本論』の経済学的範疇の展開のうち、やがて賃労働者の自覚過程をこそみるべきだと痛感された点は、まさしくマルクス主義における主体性の提起であった。教授があえてヘーゲル『論理学』の「思弁的」契機を重視すると強調された真意はよく了解できる。（たとえば、D、七八―八〇参照）

ともあれ、われわれは再び教授がマルクスのいうWを根本的には哲学として捉えられ、科学を哲学の「否定的媒介」とみておられることについて理解と考察を進めよう。

教授は戦後、社会科学の科学性に関して「社会科学と哲学」（一九五〇）および「社会科学における理論と検証——『資本論』にたいする一つのアプローチ——」（一九六〇）という二つの明快な論文を発表しておられるが、教授はこれらにおいて、社会科学が科学として成立してくる過程をば自然科学的合理性を規範とした自然法的科学観（ホッブスなど）と、仮説と検証という方向に科学を展開させた実証主義的科学観（ロック、スミスなど）とし、これらをそれぞれ『資本論』にいたるまでの社会科学の二つの系譜として説明したのち、『資本論』では「経験科学がその学問的構造としてもっていたところの合理性と実証性との両極的統一は、……哲学と科学との矛盾的統一に転化していると見なければならぬ。」といている。そして、これをいいかえれば「哲学としての合理性が科学によって実証されねばならないということ」だ、といわれる。（E、四五）

この「哲学としての合理性」と「科学による実証」ということは、まさしく問題の核心にふれている。そこでマルクス『経済学批判序説』の「経済学の方法」につきながら、下向・上向過程をめぐり、また歴史と論理の相関をめぐっての検討が必須となるが、その前にいまま少し「科学」の規定をたしかめておかねばならない。すなわ

ち、ここに教授のいわゆる「哲学としての合理性」を明らかにする手がかりとしてヘーゲルの科学観を省みる必要がある。というのは、教授の経験科学に対する規定、そしてその哲学との関連は、基本的にはヘーゲルに拠っていると考えられるからである。

「経験的な個々の学問は、その対象を前提し、各人がこの対象について同一の表象をもち、また、そのうちにはほとんど同一の規定を発見しうることを、希望的に想定し、しかも、この規定を、対象に関する分析、比較および他の推理によって、諸々方々から拾い集めて提出する。同様に、絶対的端緒となりうるところのものも、或る普通に既知のもの ein Bekanntes であることを必要とする。そして、もし、これが具体的存在 ein Konkretes であって、したがって、そのうちに多様の規定を蔵するものであるならば、そのばあい、この存在がそのうちでもつところの関係が、既知のものとして前提されている。したがって、この関係 Beziehung は、或る直接的な存在として与えられている。しかしながら、関係というものは、直接的な存在ではない。なぜかというに、関係は、区別されたもの相互のあいだの関係として、はじめて関係たりうるもので、したがって、そのうちに媒介を包含しているからである。……中略……。ゆえに、或る具体的存在、すなわち、総合的統一のうちに含まれる関係は、たんに、それが発見された事実であるという点で、必然的になるのではなく、むしろ、統一のなかへ復帰するところの契機の、固有の運動をつうずることによって生ぜられるかぎりで、必然的なのである。そして、その運動は、分析的方法、すなわち、事柄そのものに外的で、ただたんに主観のうちに存するような行為とは、正反対のものである。」

このヘーゲル『大論理学』からの引用文は、梯教授が『資本論』における科学と哲学との関係を特に端緒の問題と結びつけて解明される論理的根拠となっているものである。教授は「経験的科学は、自然科学にせよ社会科学にせよ、一般的に、若干の感性的諸対象を、その諸現象において比較し、分析し、そこにおける共通の本質的関係を抽象して、これを法則として定立し、さらに、諸法則の統一原理にまで、どこまでも、かかる分析的な思维運動を本質の領域において下向せしめるもの」(A、三八六)だといわれる。ところが、科学の「研究者が試行

錯誤的な研究の過程においての実際に体験している出発点なるものは、正しい結論が果して導きだされうるかどうかの確実な論理的な保証のない、すなわち必然性のない、単に偶然的なものである」（A、七）しかないものである。そして教授は、このようなヘーゲルの主張が「事実であるかぎりでは、マルクス主義経済学といえども特殊の経験科学の一面をもつかぎりで、この彼の主張をそのまま承認するほかないであろう」（A、三八七）といわれるのである。こうして「具体的対象を前提する経験的な特殊諸科学には、真実の意味では、学的体系の端緒はありえない」とすれば、『資本論』を「たんに経済科学として見る人々には、商品の端緒的意味を方法的に論ずることが、無意味なものに思われるにいたることさえ生ずるであろう」（同上）という。そして、この端緒が仮説でしかありえぬ経験科学の限界を救うものは『資本論』がもつ「経済哲学の性格」であり、教授はこれを、その「学的体系性」によって説かれるのである。（A、三八七以下）

これまで、わたしの視角から簡単に梯教授の所説を跡づけたただけであるが、明らかになったことは次のようなものである。

「資本論」はその「理論面」において、「経験的な科学の面と概念的思惟の自己展開という哲学的な面とが区別されて、しかも、それぞれの区別された面が同一性にある」（E、三三）こと。そして、教授のいわゆる科学面とは「合理性」と「実証性」を条件とする経験科学の面であって、そこでの「合理性」はあくまで仮説性を免れぬことである。科学は下向的分析過程であって上向的総合過程ではなく、「外的反省」による学であって「内的反省」とは無縁である。「科学的反省は、たとえ特殊から普遍へとその包摂関係を無限におしすすめるとしても、

対象ということの性格、すなわち認識主観に相対的な有限性をまぬがれないことに制約されて、その究極の具体的普遍も仮定であることをまぬがれない。(C、六)

教授のこの科学性の規定について、それ自体としての是非を論ずることは意味がない。むしろ、この基本的な規定から、『資本論』把握において当然その哲学としての学問性が主張され、その論理的展開が行なわれるわけだが、その全体構造からみて、ヘーゲルに拠る教授の科学、哲学の学的規定が、『資本論』についてどれだけマルクスの真意を具体化するか、もしくは偏倚せしめるか、また偏倚せしめるということはないにしても、教授の経済哲学的原理構成が実は賃労働者としての主体が『資本論』の学的体系の根底を捉えることにもとづく自覚構造の展開だとして性格づけられるのではなく、それ自体『資本論』の総合的学問体系だとされた場合、教授のいわゆる主体性の立場の積極的展開の反面、科学としての『資本論』がなんらかの客観性を奪い去られる、ないしは客観的認識の面が蔽われる、というようなことが起ってはこないか。このことを検討することこそ『資本論』の学問論としては最も意味のあることと思われる。

(1) Hegel, *Wissenschaft der Logik*. S. W. von Glockner, Bd. 4, S. 79~80 訳、岩波版六八頁。

## 二 自覚的体系としての『資本論』把握について

『経済学批判序説』における「経済学の方法」は、教授がしばしば論究されるところである。すなわち、下向過程と上向過程の相関は『資本論』における科学と哲学の関係を明らかにし、また『資本論』の体系的性格を明らかにするものと思われるからである。このことは更に、歴史的実在と論理的展開の関係という視角からも論究

される。

マルクスにおける「弁証法的な概念的思惟の上向運動の各段階において規定される範疇の序列は、現実の歴史的發展における実在的な諸形態の時間的序列に照応するという、論理的なもの、歴史のものとの一致についての思想が、彼（マルクス）において、ヘーゲルから唯物論化されて継承され」（A、三八〇）ており「上向的叙述の端緒としての単純商品は、すでに方法論的に、現実的な資本制商品からの下向的な科学的分析を前提してのみ、定立されたものと理解せねばならない。すなわち、ヘーゲル的な思惟の体系的な自己運動としての総合的演繹の方法の端緒は、マルクスにおいては、実証科学的な分析的帰納の途を媒介にしたもの、———そのかぎりでは、むしろ、この分析的の下向運動のはじまる現実の出発点としての資本制商品が、もっている論理的な全体的構造の一契機たるにすぎないもの、———と見ることができる。」（A、三八）ここにすでに、教授の不動の科学規定と、端緒商品の論理的契機としての性格が示され、歴史的な商品、貨幣、資本の発展は、実在でありながら観念的契機をもち、論理的展開は観念的展開でありながら実在的契機をもっている、という教授の見解の一端が示されている。教授はまた、「歴史的现实と『経済学の方法』』という論文でも、その第三節を「下向的な科学的分析と上向的な哲学的な演繹」と名づけて、ヘーゲル『法哲学』をもしきりに批判的に引用対照されながら「感性的実在と思惟的概念との統一」が「定有的現実性と理性的概念との必然的一致というヘーゲルの△理念▽の、マルクスによって唯物論化された思想」（B、二一六）であることを説かれ、また、下向過程と上向過程の相関説明によって「マルクス経済学に固有な学的体系性が、哲学と科学との弁証法的統一であることに由来する」（B、二一七）ことを説かれる。教授は、マルクスに忠実につきながら論理的再把握を展開されるが、教授独自の方向としては



「△理論的方法▽」は、対象的實在としての近代ブルジョア社会自体がマルクスの学問的生命を媒介にして、自己矛盾的に、人間意識に現象するところの歴史的現実のロゴスでなければならぬ」(B、二三〇) ことの基礎づけがなされようとしている。

わたしは、ここで「経済学の方法」を介して、すなわち歴史的實在と論理的展開の相関把握を介して、はじめてまず教授と非常に異なった考えを示さなければならない。

マルクスのいうとおり上向の過程は「抽象的な諸規定が思考の道をへて具体的なものの再生産へみちびかれる」(『批判』岩波文庫、三二三) わけだが、論理的展開としての「あたまのなかに思考された全体としてあらわれる全体」(同上、三一四)は、「現実の主体」を、すなわち「いままでどおりあたまの外側に自主性をたもちつつ實在する」主体を、すなわち「社会」を前提としている。歴史的實在は、すなわち市民社会が前提であって、論理的「諸カテゴリーの運動が実際の生産行為」(同上、三二三)ではない。しかしながら論理がそれじたい体系をもつものであるかぎり、換言すれば、論理が単に歴史的實在の各事象の反映ないし模写ではなく、論理的全体が歴史的實在の全体的本質を反映しているというべきものである以上、感性的世界を前提としてそのロゴスとして確立されたうえは、論理体系そのものとしては経済学的カテゴリーの体系といっても感性的世界から独立に存在するものであり、カテゴリーの展開過程に応じて検証を必要とするようなものではない。教授は、『資本論』の諸カテゴリーの学的性格を考察して、それが経験科学における仮説という性格のものではなく、いわば「具体的普遍としてヘーゲルの理念の本来の構造的必然性をもっている」とされながら、「にもかかわらず、『資本論』が他面において経験科学でなければならぬかぎりで、なお、そこに検証が不可欠であるとすれば、その諸範疇

が思惟と感性との矛盾の統一ということに、この理由を求めねばならないであろう。(E、四六)といわれ、上向過程のもつ「実在的諸現象からの下向としての帰納的分析によって得られた悟性的な概念規定を、前段階から演繹されてきた理性的概念の否定性のうちに思弁的に総合する」という弁証法的な統一の一步一步の進展であることを見る。(同上)として検証の意義を肯定されようとする。教授のこの考え方は、『資本論』をヘーゲル哲学の批判的継承として把握されようとする場合、『論理学』とあわせて『精神現象学』を非常に重要視され、『資本論』は感性的世界の論理体系であるが故にこれをヘーゲル哲学でいえば『精神現象学』と『論理学』とを合わせた学的性格をもつ、と解釈しておられることと結びつく。また、この論理展開と検証との統一という考え方が、学的体系の全体性に関する基本的な考え方と結びついてくる。すなわち、検証にあたって「より抽象的な前段階の範疇を」「より具体化された範疇にして始めて検証的に堪えうべき実在的事態に対して」「機械的に適用して検証してみる」(同上)というような誤りをおかしてはならない、「検証不可能ならば検証可能性をもつまでに、範疇的概念を具体化すればよいのである。」といわれ、『資本論』を産業資本段階における体系である、とする教授の見解が現われる。「同じことが、帝国主義段階の特殊な事態に対し『資本論』の理論が直接的に検証されえないとするならば、検証が可能になるまでこの理論を自己媒介的に具体化するために、『資本論』の叙述を超えて、その上向的な概念的思惟としての総合的演繹を、徹底的に継続すればよい。」(同上)といわれるのである。

『資本論』の体系の原理的性格は、歴史的段階が帝国主義に進展することによって止揚され、『資本論』の叙述をこえて、上向過程を徹底的に継続することにより、より進展した段階における体系がえられる、といったものであろうか。わたしは、資本主義の原理体系は、歴史的実在としての近代市民社会の本質的展開である以上、

そのカテゴリーの展開過程において、徹底したい方をすれば、いかなる例証によって支えられる必要もないのであり、現実が資本主義であるかぎりには、歴史的段階が展開することによって原理、そのものも展開されるものと考へることはできない。

ここで、わたしは、教授が『資本論』を哲学として性格づけられるところのものと対極的な主張をしているようである。すなわち、教授は『資本論』の哲学的性格を主張される場合、その論理学としての性格（これが体系性と結びつく）と、主体的自覚過程——過程即場所の説——としての性格であるが、（これらは教授の場合、勿論単純にならべて考へうるものではなく、後者を根本として有機的に関係しているが）、わたしは『資本論』の論理的体系としての性格こそ、ヘーゲルが経験科学を規定したような性格とは全く異なった、しかもヘーゲル哲学が哲学であったのに対して、決して哲学だとすることできない *Wissenschaft* の真髄を示すものと思へるからである。

わたしは、マルクスの弁証法体系は、究極は勿論歴史的事実の一元論に帰するとはいへ、ヘーゲルの絶対的一元論と比べて、その歴史的意識の徹底の故に、そして若い頃の疎外論的主体性自覚の立場に拠って、歴史と論理の相対的二元性が確立されていると思う。『資本論』における経済学的カテゴリーの全体的本質は若い頃のいい方をする、『人間的自己疎外の本質』以外の何ものでもない。そして、この社会の総体的疎外は歴史的事実に根ざしているが、疎外の本質はどこまでも自己を貫徹しようとしてやまない。

ヘーゲル哲学における「疎外」は、自覚によって回復されるものであり、「対象化」と根本的に同じものであることはマルクスの批判したとおりである。しかし、マルクスが捉える「疎外」は自覚によって回復できるものではない。自覚によって「疎外の本質」を排棄する行動をしなければならない。このことは「疎外の本質」が、

「資本」として、歴史的には主体であることを主張しつつ自己貫徹し、すべての事がらを転倒させ、「物神性」のうちにつつまこもうとする現実的疎外の本質であることを示す。

わたしは、ここに教授に問い、教えを乞わねばならない。

それは、表象につねに浮べられていなければならぬのは「社会」、資本主義社会であり、究明さるべき論理の体系が、そこにおける「経済法則」「経済的諸関係の組立て」（『批判』三三三）である以上、学としての究明はマルクスのいわゆる「ブルジョア社会の自己批判」（同上、三三二）として、市民社会の本質の自己批判的体系として貫徹されるべきものではなからうかということ、そしてこの体系は、単なる経験科学ではなくまさしく弁証法的体系であるが、ヘーゲルの絶対精神を主体とするものでなく、歴史的社会的「疎外の本質」すなわち「資本」を主体として一貫して捉えられるべきものであるからには、これこそマルクスのいう意味の科学となすべきではなからうかということである。

教授が『資本論』を哲学とされる場合も、勿論絶対精神を主体とされるわけではない。しかし、歴史的主体として賃労働者を主体にされる場合、それはまず世界観的立場が学の体系的展開に積極的に打ち出されるという意味において、絶対の体系であり、哲学であろう。わたしは、『資本論』の学的本質は、このような意味における哲学であってはならないと考えるのである。たとえば、教授が『資本論』のカテゴリー展開を「個人的意識と普遍的論理との統一において成立する特殊な歴史的個性の自覚的限定の論理過程である。」（C、六三）といわれる場合、わたしは『資本論』の論理展開は、学としては、まず徹底的に普遍的論理を歴史的な主体として体系的に把握す

べきであり、これの個人的意識との統一（実践哲学原理）は、この客観的な論理体系の把握を介して自覚されるべきものと考えられる。過程は「特殊な歴史的個性の自覚的限定の論理過程」としてではなく、特殊的に歴史的な社会、すなわち資本主義社会を、その客観的本質（資本）を主体とする貫徹した論理体系としてあくまで冷徹に認識されるべきものと考えられる。

わたしは、まさにエンゲルスのことばを極端に継承した「反」の弁証法Ⅱ客体的弁証法に対する梯教授の批判の意義についてのべた。いま、わたしは、これら客体的弁証法の論者とは根本的に異なった構造にたつものではないが、「反」の立場、「否定的理性」の立場を『資本論』把握に関して梯教授に対するテーゼとしなければならぬ。客体的弁証法は『資本論』の論理過程をも、いわゆる唯物弁証法の適用として客体的二者斗争の過程のようにみてゆく。そこには、歴史の実在、そして労働主体とその社会的対象化が總体的疎外を余儀なくされているような資本主義社会に対して、労働と資本との主体的把握が全くない。これに対して、わたしは「反」の弁証法、「否定的理性」の体系を主張することにおいて、歴史の実在の市民社会的本質、すなわち「資本」、「自己増殖する価値」を論理的有として措定し、これに対して真実なる歴史の実在の主体、すなわち労働主体は、むしろ論理的には学的主体として「資本の体系」の「質料的担い手」となるものとみる徹底した論理体系を構成することこそ、マルクスのいわゆる科学の真髄ではなからうかと思うのである。ここでは、ヘーゲルの規定による外的反省の科学などは、科学 Wissenschaft といえるものではなく、その一契機にすぎないものとなっているのである。

わたしは、すこし自己主張にはしりすぎたようである。マルクスの『資本論』は、右のわたしの主張のとおり

に具現化されているわけではない。わたしは、現在のわれわれがマルクスの『資本論』を活きたものとして再構成するとき、純粹な原理論として貫徹させるべきものであると考え、マルクスの『資本論』の中にもこの基調は強く働いておりながら、しかも『資本論』そのものは歴史的事実の具象性と結合して、むしろ学的に難解な諸問題をのこした、と思っている。梯教授は、むしろ右のようなわたしの主張とは対極的な学的立場から『資本論』の再把握、再構成を考えてこられたわけである。すなわち、賃労働者の主体性を積極的に措定し、カテゴリーの展開をも経済学的なそれよりも、更にふかく労働主体の自覚過程として把握されるわけである。わたしの考えるところでは、ともに、客体的弁証法の適用による『資本論』把握に対して根本的な批判の立場にたち、『資本論』をマルクスの真意において根本的に再把握しようとするものであるが、学問としての把握で大きく立場も分極化したということができるのではなかるうか。

だから、例えば、さきに触れたように端緒商品の体系的意味を資本主義商品の論理構造から規定されてゆく正確な考察や（B、第三章その他）、価値形態論を主として『資本論』初版本によりつつヘーゲル論理学の「本質論」を照応させて解明される見事さ（『現実的な学としての資本論』第二、三節など）、更には『経・哲手稿』におけるマルクスの精髓を捉えて「商品人間」、「労働人間」を『資本論』のうちに論理的に読みこもうとされる場合の面白さ（A、第二篇）、等々の論考については教授から貴重なものを教えられ、またきびしい指針を与えられつつも、全体としての『資本論』の学的把握としては全くどうともならぬ距離を自覚しないわけにはいかないのである。また、別のいい方をすれば、部分的には全く共鳴したり、指針をえたりするということはわたしが教授と主体的立場をひとしくするということであって、そもそも教授の「賃労働者の自覚体系」として『資本論』を捉え

るその立場そのものは全くそのままわたしのものでもあると考えているし、労働主体が『資本論』によって階級的自覚を基礎づけられ、真実なる歴史的实践の媒介とすべきだという基本的な考え方も教授と変らないと思つてゐる。

ただ、『資本論』を、下向過程のみならずむしろ上向過程としてこそ科学として一貫した資本の論理体系であるとして捉え、そこでは労働主体は体系の底にひそみ、資本が資本として労働力を完全に把握して自己増殖的展開を行ない、そこにいかに資本が完全に労働生産力を把握しとおそうとしても、不可避的に露呈せざるをえない必然的矛盾(恐慌)、これを内在的矛盾として認識すること、この科学が、マルクスのいう *Wissenschaft* の積極的本質だと考える点で、わたしは教授の「科学と哲学の弁証法的統一」説に同意できないのである。労働主体が、体系の論理的展開に主体として措定されて把握されることは、資本の論理的主体性に対して、更にその根底に絶対的主体をたてることであり、このことは究極的主体の立場の宣明としては正しいとしても、丁度マルクスが『資本論』において陥らざるをえなかつた誤り、すなわち当時のイギリスの資本主義段階による傾向を法則的認識に混入させた誤りと比すべき誤りの可能性を許す方法的立場を定立することになると思われるからである。

たとえば、教授はこのようにいわれる。「経験の自己意識的な反省において論理的本性が自覚され現実化してゆくという点から、背後にある論理的本性はずねにかかる経験の一步一步において改変され、経験とともに自覚的に自己転化をとげつつ自発自展するものだということの意味せねばならぬ。これが自己運動する論理の現実性である。」(C、六一)『資本論』の学的論理は、このように「自覚的に自己転化をとげつつ自発自展する」主体では、全く学の底にひそめているのであって、このような自覚的論理体系は『資本論』の实践、哲学的再構成とよぶ

べきものであろう。この実践哲学の原理的な大前提として『資本論』がわたしのいう意味の学的体系として捉えられ、これを枢軸とする科学認識の具体化を媒介として、はじめてこの実践哲学的自覚体系が正しく実現するものではあるまいか。この客観的原理体系としての『資本論』の面を、主体的実践哲学の否定的媒介面としてだけ意味づけ、『資本論』を「科学と哲学との弁証法的統一」とすることは、『資本論』におけるマルクスの真意を現代のわれわれに活かすことにはならぬのではなからうか。

教授はしばしば流、通主義に対する批判的立場を主張されているが、わたしの『資本論』に対する考え方も典型的な流通主義ということになるかもしれない。しかし、最も客観的に、論理的に、資本を捉える場合、いったい資本そのものこそ流通主義的だといえないであろうか。「自己増殖する価値」であるところの資本の「一般的範式」は $G \rightarrow W \rightarrow G'$ であり、資本主義的資本すなわち産業資本は、この $G \rightarrow W \rightarrow G'$ が生産過程を把握して $G \rightarrow W \rightarrow P \rightarrow W \rightarrow G'$ として実現したものに他ならない。資本は、産業資本としても使用価値を生産すべく生産を行なうのではなく、価値を自己増殖すべく生産するのである。 $G \rightarrow W \rightarrow G'$ なる資本の普遍的形式が歴史的内容を自らの形式のうちに包摂しつくしつつ自己運動しようとする展開こそ資本主義の学、の体系だということを、徹底した論理学者である梯教授がどうして認めようとされないのか、わたしには全く不思議なことと思われる。

論理のカテゴリーを生むもの、資本を生むもの、としての歴史的実在の側に学問的立場をたてながら、資本主義の論理的体系を首尾一貫して捉えようとするなどということは、二兎を追おうとして一兎をもえぬ結果におわるにちがいないものとわたしは思う。尤も、この批判は教授に向けられるのではなく、一部の歴史主義的『資本論』学者に対するものというべきであるが。



梯教授の哲学は、その積極面に向ってわれわれが学び検討しようとする場合、ヘーゲル哲学との壮大な対応、西田哲学との主体論的結びつき、自然史的世界観と『資本論』の世界との関連、すなわち教授のいわゆる「開かれた体系」の問題、等々の視角から深く入り、実に豊かなものをつかみうる思想体系である。わたしのこの小論は、その入口に立止まっただけのほんの予備的な省察といふべきものにすぎない。

#### 【付記】

拙稿「▲労働の疎外▼」と「▲労働力の商品化▼」（本誌第十一巻第五・六号所収）で、わたしは梯経済哲学の内容にどこか深く食いこんだ検討をしたいと考えていたが、自分のテーマの展開が中心になってしまっただけで、そのことを果たすことができなかった。それ以来非常に心残りであったので、いまや教授の哲学の主力が結集しているといつてよい。「▲向自有▼範疇」論に対する考察を志し、一度機会をえて発表したものと昨年の初夏以来断続して草稿を重ねてきた。

幸いにして編集部の方快諾をえて寄稿のはこびとなったが、苦闘を重ねた末「▲向自有▼範疇」論考はどうにも完成できず、その方法論的前提となる教授の『資本論』の学問的構造に対する考え方の検討をまとめてみるにとどまった。

おわりに、梯教授の深い哲学的思索に対して尊敬の気持ちを新たにすると共に、併せて編集部の方御好意に応えるべき予定の論文を完成することができなかったことをおわびしたい。